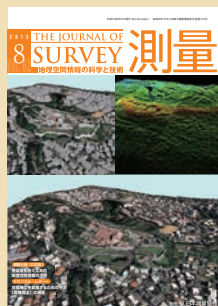


表紙 の 説明

首里城 (琉球国の輝きを伝える華麗な王城)について



今月号の表紙は、デジタル航空写真と航空レーザデータから作成した「首里城」のデジタル画像です。航空レーザスキャナにより取得したレーザ点群データ(表紙右上の画像)と垂直・斜め方向のデジタル航空写真から建物や地形の3次元モデル(表紙左上の画像)を構築し、それにデジタル航空写真から抽出した色やテクスチャの情報を正確に重ね合わせることで、表紙下部に示すデジタル鳥瞰図を作成しました。この図から琉球石灰岩を用いた長蛇のように折れ曲がる石壁、石壁上の矢盾壁(矢立壁)などの構造が分かります。

■表紙画像のご提供先

「首里城」

国際航業(株)・PLW Modelworks共同制作

〒102-0085 東京都千代田区六番町2番地

<http://www.kk-grp.jp> Tel : 03-3262-6221

使用機器：デジタル航空写真カメラ(DMC Z/1 imaging社製)

航空レーザスキャナ

(ALS50-P2 LeicaGeosystems社製)

沖縄では「城」を「グスク」と読みます。首里城は琉球統一王朝の王城として474年間にわたり栄え、その間に25人の王が君臨しました。

この統一王朝以前の琉球は、北部に「山北(北山)」, 中部に「中山」, 南部に「山南(南山)」と称される3勢力が鼎立し覇を競っていました(三山時代)。その後、南山の一角から勢力を増した尚巴志が、1416年に北山を攻略し、1429年には南山を制圧し、統一王朝(第一尚氏王朝)を樹立しました。なお、首里城は1420年に築城されました。

首里城は数回に及ぶ焼失や破壊を受けてきた歴史があります。焼失は、第一尚氏王朝時代の1453年、第二尚氏王朝の1660年と1709年です。すなわち、1660年の首里城焼失から10年の1671年に再建し、1709年に再び全焼した後、1712年には主要施設を、1715年には全て再建しました。1879年琉球処分以降は、軍隊の駐屯所、各種の学校などに転用され、1945年の沖縄戦による米軍の猛烈な集中砲火によって完全に破壊されました。

1992(平成4)年に正殿などが復元され、現在私たちが見る首里城は、第二尚氏王朝十一代の尚貞王が瓦葺きで再建した首里城の姿とされています。

大手道にあたる綾門大道にあるのが有名な守礼門で当時の中門でした(図-1)。扁額には「守禮之邦」と書かれています。

首里城の特色の一つに多様な城

門が挙げられます。首里城は中国皇帝のいる西方を正面として、外郭の歓会門を正門としています(図-2 A)。石造のアーチ門で、その上に木造の櫓が載る形式のものです。歓会門を通り石段を上り詰めると瑞泉門(図-2 B)があります。門に向かって右下方向に清水が流れ、門の名称の由来となったようです。

さらに上ると、漏刻門(図-2 C)があります。漏刻は水で時を計る意味であり、この門を入った内庭には日影台(日時計)や門櫓内には水時計と時を告げる太鼓が置いてありました。

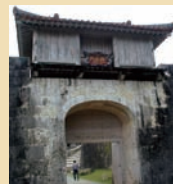
漏刻門を潜るとすぐに広福門があります(図-2 D)。広福門は門としての機能のほか、神社や寺のことを扱う寺社座と戸籍などを扱う大与座として使われていました。広福門を潜り左折すれば正殿の御庭に入る奉神門があります。奉神門の前方に御庭と正殿が続きます。

正殿(図-3)は、文字通り首里城の中心であり、国王が政治や儀式を行う際に出御する城内で最も重要な建物です。三階建ての入母屋造、本瓦葺の木造建築です。中国様式の影響と大きな唐破風(からはふ)や破風飾りには本土の影響も受けた琉球独特の意匠が見られます。正面の石階段が八の字であるのも特徴的です。

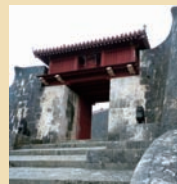
首里城は、2000(平成12)年に他のグスク群とともに遺構が世界遺産に登録されました。(瀬戸島政博)



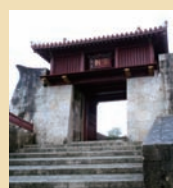
図-1 当時の中門であった守礼門(筆者撮影)



(A) 歓会門



(B) 瑞泉門



(C) 漏刻門



(D) 広福門

図-2 首里城にある代表的な城門(筆者撮影)



図-3 首里城の中核である正殿(筆者撮影)